

KOBE  
university

STYLE

神戸大学

2011 AUTUMN Vol.16

KOBE  
university

STYLE

神戸大学

## INDEX

特集 神戸大学都市安全研究センター学生ボランティア支援室  
被災地へ運ぶ希望と笑顔 ..... 3

特集 国際交流  
海外との絆を深める ..... 10

特集 男女共同参画  
女性研究者NOW ..... 14

キャンパスライフ  
サークル活動満開「躍動、感動」 ..... 16

同窓会・校友会・育友会  
欧州神戸大学同窓会発足 ..... 18  
育友会全学懇談会開催 ..... 19  
「硬式野球部 100 年史」出版記念パーティー開催 ..... 19

保健管理センターだより  
心臓突然死!・・・防ごう基礎疾患の早期発見で ..... 20

歴史のひとつま  
神戸大学のキャンパス〈その3〉楠地区 ..... 22

お知らせ  
「神戸大学統合研究拠点」が活動開始 ..... 23

# Student Volunteer Support

特集・神戸大学都市安全研究センター学生ボランティア支援室

## 被災地へ運ぶ希望と笑顔

東日本大震災、神戸大学遠野ボランティアバス活動の記録

今年3月11日に発生した東日本大震災。その発生直後から、神戸大学生から「被災地で何かできないか」「被災地にボランティア活動に行きたい」という声が大学に多数寄せられました。また実際に発生直後に被災地に行き、活動を行った学生もいます。

その後、神戸大学としても対応を進め、4月末にはゴールデンウィークを利用してのボランティアバス2台を走らせました。その後も、以下に掲げる表の通り、大学が用意したボランティアバスや、学生個人での参加で被災地での活動が行われています。

神戸大学学生ボランティア支援室では、岩手県遠野市にある「遠野まごころネット」を拠点として、沿岸部の大槌町・陸前高田市などを支援する「神戸大学遠野ボランティアバス」を9月末までに4回企画して実施しています。被災地で必要とされている瓦礫撤去や泥出し・清掃などのボランティア活動を行うとともに、神戸の災害NGO「被災地NGO協働センター」と協力し、足湯ボランティア活動や「まけないぞう」など、被災した方とのコミュニケーションを大切にしながらユニークな活動を展開しています。

今回、このボランティアバスに参加した学生3名が見た被災地の現状をご紹介します。



東日本大震災被災地での神戸大学生ボランティアの活動状況（9月末）

活動種別	参加学生数	活動期間
学生ボランティア支援室（第1次）	23名	4/30～5/8
学生ボランティア支援室（第2次）	17名	6/28～7/5
学生ボランティア支援室（第3次）	20名	8/16～8/23
学生ボランティア支援室（第4次）	20名	9/8～9/15
発達科学部（第1次）	18名	4/28～5/5
発達科学部（第2次）	18名	9/17～9/24
いわて GINGA-NET プロジェクト（阪大と合同）	10名	8/31～9/6
その他（個人・研究室単位）	21名	4～9月、届け出のあったもののみ
<b>合計</b>	<b>147名</b>	



# 奪われた“自分”と 出逢い直す場を求めて

発達科学部 4年 武久 真大

## 3月12日・宮城県名取市

「今やっと出てきたところなんです」。3月11日当日に神戸を飛び出して丸1日経った12日の夕方到着した宮城県名取市で、仙台空港方面の路上で出会った男性3人組は、水没した建物から机などを棧橋にしてどうにか脱出したところだった。さらに海側では、ゴムボートでの救助活動の真っ最中であった。そのリアルさに驚きながら、被害の大きかった閉上（ゆりあげ）地区に向かった。避難所となっていた学校も1階の入口部分まで水没し、次の津波が来たら耐えられないということで、さらに内陸の避難所に移動するためにバスが出ていた。私たちはそこで犬を連れたひとりの女性と出会った。その女性は家族を全員津波で亡くし、頼れる相手はその犬だけになっていたのだが、犬をバスに乗せることに遠慮し、その学校に残ろうとしていた。そこで、その女性を私たちの車に乗せ避難先の学校へと送ることにしたのだった。

その晩は特に冷え、たくさん着込み寝袋に潜って寝たにも関わらず、翌朝、足は冷たくなり、歩くのもつらかった。その日、炊き出しの手伝いで昨日女性を送った避難所に行くと、その女性は犬と一緒に外で寝たと言っていた。寒さに凍えながらも、世界でふたりだけになってしまっ

た、その犬と、一緒にいたい。そのひとにとって、犬と離れ離れになってしまうことが、先の見えない避難生活でどれだけつらいことなのだろう。他に印象的だったことは、私が名取に滞在した2日間幾度も目の当たりにすることになった、涙を流し、抱き合う姿。お互いに生きていたことを祝福しあうその光景を、私はただ眺めるしかできなかった。その機会が、避難所で出会った数々のひとに1度でも多く訪れるよう、願いつつも。

## 3月15日・山形県米沢市

被災地NGO協働センター第1次隊の私たちの目的の1つが、被災地に何が必要とされているのかの調査だった。それには多くの被災地を巡る必要がある。14日には自衛隊による主要幹線道路のがれき撤去が進む宮城県南三陸町及びその避難所に入った。さらに岩手県、その沿岸部へと向かう途上、神戸からの指示で福島からの避難者が集まってきている山形県米沢市の支援に入ることとなった。

到着は15日の夜。市内は雪に埋もれ、米沢市営体育館とその周辺施設に避難している福島の浜通りから来た人たちは、行きがかり上辿り着いた右も左も分からないまちで、寒さと慣れない雪の生活に難儀している様子だった。被災状況はひとそれぞれ。津波から自転車で逃げている

る途中、消防車に乗せてもらえなかったら死んでいたと語る、親を津波で亡くした子がいる。他方、原発事故の影響で避難してきている人たちもいて、避難指示が出ていた半径20キロ圏内からの避難者、30キロの屋内退避地域とされたところから自主避難してきた人、30キロを超えたところから避難してきた人と様々。個々を取り巻く状況は本当に様々。津波で何もかもなくした家族は、何も持たない。知り合いもいない避難所の中で子どもたちは自分たちの布団にくるまり、ずっと横になっていた。しかし津波の被害を受けていない子どもたちは、コンセントにむらがり、ゲームに興じていた。津波の被害を受けていなくても、内定が決まっていた職場が水没し、どうしたらいいか途方に暮れている女の子や、地震直後に電話したはずの友達を津波で亡くした子もいる。「俺のまちに帰らないと、ひとりひとりが帰らないと、あのまちは復興しないんだ」「ひとのいない、死んだようなまちになってしまった。それを、もっと、たくさんのひとに見てもらいたいんだ」「もう、俺のまちは、入れない。これからあのまちは地図から消えるんだ」「子どももいるから、もうあのまちには戻れない」「彼氏と離れ離れ。こんなに離れたことないから、つらいよ」。ひとりひとりの物語が、そこにはたくさん広がっていた。

コーヒーを淹れたり、お話や足湯をしたりと避難所で生活する中で、たくさん声を聴いた。仲良くなった30代のお母さんは一緒にコーヒーを飲みながら「足湯をしてもらったときに初めて、自分に戻れた気がするの」とぼつんとつぶやいた。今後どうなるか分からない不安と戦いながら、子どもたちにはそうした顔を見せまいとしつつも、常に子どもと一緒にいなければならない生活の中で、だいぶ張り詰めていたのだろう。そして、ひとり配膳の列に並んでいるときに、うずくまってつらそうにしていた姿を、私は知っている。そんなひとの数少ない居場所になれていたのなら、1つの心が壊れるのをとめられるなら、私がそこにいた意味はあったんだと思う。そして、知らないまちで、これからの不安を抱え避難所から居宅へと移って生活していくとき、ひとりひとりが孤立しないよう、しんどくならないよう、そうした自分に戻れる居場所が必要なんだということだろう。

#### 4月26日・岩手県陸前高田市

4月初旬に米沢から神戸に戻り、次に被災地へと向かったのは、4月の終わり頃。神戸大学遠野ボランティアバスの先遣組として、岩手県遠野市に拠点を置いての、岩手県陸前高田市での活動だった。役所も社協も被害を受け、陸前高田市単独では避難所の実態把握と支援に困難がある状況で、遠野市に拠点を構える後方支援組織「遠野まごころネット」の課題となったのは、陸前高田市市内の避難所の実態把握と関係性の構築だった。

4月25日から数日、神戸からの先遣組は、陸前高田市の高田地区を担当して避難所を訪問した。公民館や病院に毛布ではない敷掛け布団と枕を持っていったり、特別養護老人ホームで足湯を行ったりしつつ、避難所の状態把握に努めた。火

葬場の一室を借りた避難所では「この場所を騒がしい場所にしたくない。帰ってくれ」と追い返されることもあった。そのうち、上和野会館という地区の公民館に通うようになった。

ここははじめに訪問した時には、玄関越しの会話でつばねられたのだが、布団が欲しいという話を聞いて、翌日に遠野から布団を持って行くと、「昨日の今日でほんとに持って来てくれるなんて」「今日はこの布団と枕を拝んで寝ない」という声が聴かれた。聞けば、何か足りないものはないかと話を聞きに来る人はいるものの、そうした人が実際に物を持ってきたことがなかったので、今回もそうだろうと思っていたとのことだった。

その日から上和野会館との付き合いは始まり、廊下で足湯をさせてもらったり、外で焚いている火を囲んでお話をしたり、自衛隊の物資の仕分け作業を手伝うなどした生活の過程で、はじめは玄関を開けてもらい、敷居をまたがせてもらい、上がらせてもらい、生活空間に続く襖を開けてもらい、最後には生活空間で一緒に昼ご飯を食べたり、「まけないぞう」(8頁参照)を作ったりするようになった。はじめは廊下だった足湯も、生活空間内でするようになり、自主防災会の会長さんから、地域のひとが気になっているみ

たいだから誘ってもいいか、防災無線で誘ってみようか、と言ってもらえるようになった。当たらない仮設住宅の話、1ヶ月間の苦勞、しんどさ、そういうのをぶつけるひとが、欲しかったのかもしれない。「なんだ、これからってときに帰るのか」と連休最終日には口元を緩めてもらいながら、写真撮ろう、と言ってもらえるまでになれた。そこで築いた関係は、上和野会館に避難していた人たちが仮設住宅に移っても続いている。

#### 忘れない、忘れさせない

こうした活動で大切にしたいと感じたことは、そのひとと同じことは考えられない、感じられない中で、それでも、出逢ったそのひとの傍に一緒にいたいという想い。そこから、そのひとの言葉を聴き、言葉にならないことを感じていき、そのひとが、私といるときは自分でいられるような、そんな空間にしていくこと。

そして、遠く離れたところにおいてもその人のことを忘れないでいること。そこで見えたつらいこと、大切にしないといけないことを、まわりのひとに伝え、忘れさせないように発信し続けていくこと。難しいことだけど、私は、そうしたことを大切にして、被災地で出逢った人たちと一緒に生きていきたい、そう思う。



武久真大(左から2番目)

#### 被災地 NGO 協働センター

<http://www.pure.ne.jp/~ngo/>

阪神・淡路大震災の際の震災ボランティア活動にルーツを持ち、国内の自然災害に対応して災害救援活動を行う市民団体。事務局は神戸市兵庫区。代表の村井雅清さんは、神戸大学学生ボランティア支援室の運営委員も務め、災害救援や復興支援にあたる神戸大学生ボランティアの活動に対して助言を頂いている。

今回の東日本大震災においては、発生日3月11日の夕方に第1次隊を派遣した。この第1次隊は協働センタースタッフの吉橋雅道さん、神戸大学生ボランティアの武久真大さん・鈴木孝典さんの3名から成っていた。

現在は、被災地にスタッフを置いて足湯ボランティアや「まけないぞう」の普及活動を行っており、神戸大学遠野ボランティアバスも、それらの活動と連携している。

#### 遠野まごころネット

<http://tonomagokoro.net/>

遠野被災地支援ボランティアネットワーク「遠野まごころネット」は、東日本大震災で被災した岩手県沿岸部の被災者の方々を支援するべく、遠野市民を中心に結成されたボランティア集団。代表は佐藤正市さん。遠野市は岩手県の内陸部と沿岸部を結ぶ交通の要所にあり、津波による被害が甚大な沿岸部支援の拠点となった。

「遠野まごころネット」は、東日本大震災支援で当初から個人ボランティアを受け入れるなど、草の根レベルでの活動において、中核的な役割を果たしている。

被災地NGO協働センターの村井雅清さんは同ネットのアドバイザーとなっており、また神戸大学学生ボランティア支援室も、同ネットの一員として「神戸大学遠野ボランティアバス」を企画している。



# 一番大切なのは、 人と人のつながり

理学部2年 有田 舞子

私は、神戸大学遠野ボランティアバス派遣の2次派遣（6月28日～7月5日）と3次派遣（8月16～23日）に参加させていただきました。実際に活動したのは10日間で、主に足湯ボランティア活動を行いました。時には避難所、また別の日には仮設住宅で、被災者の皆さんに足湯を楽しんでいただきました。中でも特に、陸前高田市にある高田高校第二グラウンドの仮設住宅に行く機会が多かったのですが、この仮設住宅には集会所がありませんでしたので、仮設住宅の片隅にテントを張って足湯を作りました。

2次派遣のときには、どこに誰が入居しているのか、住民の方同士がまだ把握できていない状況でした。そのため、最

初は私たちがテントを張って足湯やカフェなどのボランティア活動を行っていても、住民の方が積極的に利用されることはありませんでした。しかし、毎日仮設住宅に通いつめるなかで、私たちボランティアと被災者の方の会話、また、被災者の方同士の会話も弾むようになり、顔なじみの関係になることができました。

3次派遣で再びおじゃましていただいたときには、私たちボランティアのことを覚えておられる被災者の方もいらっしゃり、懐かしい再会となりました。このとき、仮設住宅に少し変化がありました。まず、見た目です。2次派遣のときには砂利しかなかった玄関先にプランターが置いてあり、花が咲いている家が

多く、少しカラフルな仮設住宅になっていました。2つ目の変化は、2次派遣のときにはなかった談話室が、仮設住宅の一室にできていたことです。そこでは、住民の皆さんが、毎日のお茶会を開いていました。さらにびっくりしたのは、住民の方たちが協力して、バーベキュー大会を開催されたことです。

ボランティアに参加する前は、私たちのような学生が被災者の方のお役に立たなければならないと思っていたのですが、実際にボランティア活動に参加してみると、私たちが積極的に動くことはもちろん大事ですが、それ以上に、被災者の方が、自ら前に進もうとする気持ちを持つことが大事であると痛感しました。

## 足湯ボランティア

1995年発生の阪神・淡路大震災において、東洋医学を学ぶ青年たちが始めた「足湯ボランティア」。その後、被災地NGO協働センターや神戸大学などの大学生がこの活動を学び、2004年の中越地震、2007年の能登半島地震・中越沖地震、2009年の兵庫県佐用町の水害被災地などで実践してきた。

たらいに張ったお湯に10分ほど足をつけてもらい、その間、学生は相手に向き合って手を揉む。これだけのことだが、避難所などで緊張した生活を強いられている被災者の方からは「体があたたまってホッとする」「夜、よく寝れるようになった」と好評である。

東日本大震災においては、日本財団ROADプロジェクトや、遠野まごころネットなどによっても実施され、全国的に広まりつつある。神戸大学遠野ボランティアバスの足湯は、遠野まごころネットの井上恵太さんにコーディネートいただいている。

## 足湯と「つぶやき」

足湯ボランティア活動は、ボランティアと被災者がコミュニケーションをスムーズにするきっかけになる。向き合って10分程度、手を揉んでいると、被災した方は自分のことを語りだすことが多い。これを私たちは「つぶやき」と呼んで、お話ししてもらった内容を受け止めるために、後でそれを紙に記録している。

「死体を見てもね、自分の知り合いかどうかはわかんないんだよ。変わり果てていて」「仮設住宅つつもね、何もやることないしね、ずっといたら気がめ入る」「泣いてはっかでもだめだね。笑って生きていかなきゃ」。

こうした「つぶやき」を聞くことによって、時には地震や津波の瞬間を相手と一緒に追体験することになる。足湯を通して「つぶやき」を聞き、相手の気持ちに寄りそい共感できるという点で、災害ボランティアの原点ともいえる活動である。

2次派遣の際の足湯ボランティア活動の中で、私はこのような会話を耳にしました。「何でこんなことになったんだろうね〜。のんびりここで家族と過ごそうと思っていたのに。大事なものは全部流されちゃったよ。大事なものも持っていて、意味ないね」と。私は、泣きながら話を聞くことしかできませんでした。表向きは大丈夫なように見えても、やはり心の傷は、大きく残ったままだということを実感させられたからです。でも、その方はこんなことを最後に言っていました。「助かった命、大事にしなきゃね。笑って生きていかなきゃね」って。何も言えませんでした。被災者の方の心の傷は、誰が癒せるわけでもない。被災者の方、自らが前に進んでいくしかないのだと……。

神戸大学遠野ボランティアバス派遣に参加する前は、ボランティア活動はすごく立派な行為であり、被災者の方を励まし、また、被災地の片付けをお手伝いできるというイメージを持っていました。しかし、実際に活動して感じたのは、ボランティアは、そんなに高尚なものではないということです。被災者の方は、私たちボランティアに心の傷を癒してほしいなどとは、全く考えておられません。むしろ、私たちの方が構え過ぎだったようです。

この2次派遣で味わった気持ち、経験から、3次派遣では「人に何かをしてあ

げよう」という気持ちではなく、「私自身が楽しもう」という気持ちで参加することになりました。このことを話すと、軽い気持ちで参加したように思われがちですが、ボランティアを行う人間には明るさが必要だと実感したからです。被災者の方は、震災のことを忘れていかなければなりません。そして、少しずつですが、前に進んでいかなければなりません。どうせ前に進むのであれば、暗い気持ちではなく、しっかり前を向いて、明るい気持ちで進んでほしい。そして、明るく生きてもらおう。私たちが明るく接していけば、相手も明るい気持ちになる。そして、その明るさが被災者の方を支えることになる。そういった思いから、3次派遣では、まず、私が楽しもうと決めたのです。

被災者の方と再会できたことも、もちろんうれしかったのですが、2次派遣の際に仲良くなったボランティアの方との再会もまた、大変うれしい出来事でした。



そして、人と人のつながりは大事な、ということあらためて実感しました。被災者同士のつながり、被災者とボランティアとのつながり、そして、ボランティアとボランティアとのつながり……。被災地に行って被災者に関わることだけがボランティアではないのだと気付きました。この活動に参加して、人と人とは支え合って生きていると実感し、人の温かさに感動しました。そして何よりも、すごくいい経験ができました。またみんなに会いに、そして、たくさんの人の笑顔を見に行きたいと思っています。



有田舞子（左側が本人）

## 被災者の心を支える「サンマ拾い」や瓦礫撤去

神戸大学遠野ボランティアバスでは、いわゆる「瓦礫撤去」や「泥出し」などの作業も行っている。第4回の派遣となった9月においても、まだまだそうしたニーズはあり、むしろ人手が不足しているのが現状だった。こうした作業の目的も、被災した方々の気持ちを支えるという点では、足湯ボランティアやまけないそう作りと同じだ。

5月には、津波で被害を受けた海産物倉庫から散乱してしまったサンマを拾うボランティア活動等も行った。ほおっておくと、耐えがたい悪臭を放ち続け、被災した人の気持ちを萎えさせていくので、重要な作業である。

また9月には、いずれ重機が



入る被災家屋周辺の片付けの作業を行った。手で作業した後に、また重機が入る予定があるので、一見無駄な作業である。しかし、被災した方が、自分の家のあった場所の瓦礫や雑草を見て気落ちしているため、その心を支えることを目的として実施されていた。ボランティアが片付けた後を、家の持ち主が見て喜んでいたという話を聞くと、片付けたボランティアも嬉しくなる。また被災した方々の気持ちも、多少なりと前向きになる。

人と直接は接しない労力提供の作業も、被災者の心を支えるコミュニケーションになっている。





# 「まけないぞう」が伝える想い

医学部保健学科3年 後藤 早由里

私は、被災地で「まけないぞう」を作る活動の中で、大変多くの人と出会い、いろいろなことを感じました。その一部をここで紹介したいと思います。

私が初めて「まけないぞう」を作ったのは、今年の3月28日のことでした。私は、その前日に被災地NGO協働センターのスタッフ2名の方と一緒に岩手県の遠野市に着き、現地で村井さんと合流して1泊した後、28日に初めて沿岸部に入りました。そして、地震直後から沿岸部の避難所を回って活動していた遠野市の方々の紹介で、大槌町にある100人くらいの方がおられる避難所に行くことになりました。このときは、まだ避難所内がどのような状態なのか分からなかったため、ひとまず物資を届けることを目的

とし、「まけないぞう」の創作は、避難所の状態を見て判断しようということでも出発しました。

避難所に着き、まずは物資を運びました。その後、避難所のまとめ役の方に「まけないぞう」のことをお話すると、「ばあさんたちが喜ぶんじゃないかな？まあやってみてください」とのことだったので、タオルと裁縫箱を持って避難所の中に入りました。すると皆さん「誰だ？」「一体何が始まるんだ？」という感じで、少し距離を置きながら、チラチラとこちらを見ていました。協働センタースタッフの増島さんが「まけないぞう」の説明をすると、ぽつぽつと7～8人のおばあさんと数人の子どもたちが集まってきました。タオルを配り、裁縫箱を開けると、

それぞれ針をとって糸を通し、じっと増島さんの説明を待っていました。増島さんがタオルを持ちあげて説明すると、それぞれがほぼ無言で縫い始めました。みなさん工程が進んでも縫い方を尋ねる以外はほぼ無言で縫っていました。それが、だんだんと顔ができ、目がついて、ぞうの形になってくると、「かわいいねえ」と



## まけないぞう

[http://www.pure.ne.jp/~ngo/zou/index\\_j2.html](http://www.pure.ne.jp/~ngo/zou/index_j2.html)

「まけないぞう」とは、タオルをゾウの形に縫い合わせたもの。阪神・淡路大震災のあとに、被災地NGO協働センターが生きがい・仕事づくりを目的として取組み、その後、中越地震被災地や今回の東日本大震災被災地などに広がっている。

まけないぞうを作るのは被災者で、製作費としてゾウ1頭につき100円が支払われる。そのため、内職としてゾウ作りを取組む方も多い。また、手を動かしたり、人との関わりが生まれることによって、ともすれば希望を見失いがちな避難所や仮設住宅での暮らしに楽しさと潤いがもたらされる。

東日本大震災被災地では、被災地NGO協働センタースタッフの増島智子さんが常駐し、遠野市の皆さんと一緒に、沿岸部自治体でのまけないぞうの普及を行っている。9月現在、仮設住宅に住んでいる皆さんが作成に

取組まれ、目の部品(ボタン)が足りなくなるほど活動が広がっている。

「まけないぞう」の購入やお問い合わせは、被災地NGO協働センターまで。



自分が作ったぞうを顔の前に掲げてみたり、「このぞうさん鼻が曲がってるよ」と隣の人に見せながらこやかに話したりしていました。その中で一人のおばあさんがぽつりと、「ここに来てから何もすることがなくて、津波のことばかり考えていたけれど、今は忘れていたなあ」と言いました。また別のおばあさんも、「こうやっていると気が紛れるねえ」と言いました。私は、このおばあさんたちの言葉から、「まけないぞう」が持つ力の一つ知った気がしました。

次に私が「まけないぞう」を作ったのは、ゴールデンウィークに米沢市の避難所を訪れた時でした。米沢ではまず、二次避難所となっていた温泉旅館に行きました。その旅館の一室には8人の方が集まっておられました。8人は、一次避難所にいた頃に知り合った方々で、それぞれ二次避難所に移ってからお互い会うことがなかったそうで、この「まけないぞう」作りが再会の機会になったようでした。「まけないぞう」を作り始めると、皆さんとても静かになって集中していました。1時間ほどで、皆さんのぞうが完成し、それぞれのぞうを見せ合って、楽しそうに話していました。その中で一人の方が「今日は久しぶりに疲れたよー」とニコッと笑いました。すると、「うん、そうだねえ」「今日はぐっすり眠れるねえ」と周りの皆さんも言いました。話を聞くと、二次避難所先に移ってから、食事から何からすべてやってもらえるため、1日中することがなくて疲れず、寝つけない状態が繰り返されて、疲れていないようでも常に疲れているような感覚がずっと続いていたということでした。この話を聞いて、何

かをすることによる疲れと、何もしないことによる疲れの二種類があって、疲れることが疲れを癒すこともあるのだと知りました。

帰り際、「これ、材料少し分けてもらえる？ また作ってみたいの」と言われ、材料を渡して帰りました。その約1ヶ月後、現地スタッフの鈴木さんから、その時の皆さんが今でも「まけないぞう」を作っていて、知り合いにプレゼントしたり、お見舞いのお礼として渡したり、楽しそうにしていると聞きました。避難している状態は、どうしても人に“してもらおう”という状況が多くなりますが、その中で、自分でやる何かがあって、自分がやったことで誰かが喜ぶ姿を見ることが、その人の力につながるのだということを知りました。

最後に、私が出会った人の中で「まけ

ないぞう」を仕事にしている方の話を紹介します。その方は、避難所で「まけないぞう」の作り方を習い、何個も何個も作って、やっと「まけないぞう」の作り手になったということでした。できたぞうを回収に行くと、「どこにお嫁に行くの？」と自分の作ったぞう一つひとつに話し掛け、「いいところにお嫁に行きなさい」と言います。どれだけたくさん作っても、一つひとつを大事に思っているのだと感じ、この想いがこの「まけないぞう」を受け取る人に伝わるといいなと思いました。

「まけないぞう」に関わり始めてから半年が経ち、「まけないぞう」の活動にどんどんのめり込んでいる自分がいます。これからも、「まけないぞう」の活動に関わり続け、その力をもっと感じ、多くの人に広げていけたらと思います。



## 災害ボランティアの本質はコミュニケーション

神戸大学遠野ボランティアバスは、被災した方と学生が自然な形でコミュニケーションが取れるようになり、その中から今後につながっていくような交流が生まれると良いなと思いながら企画してきました。9月までに4回ほどバスを走らせましたが、幸い被災地の方々にも受け入れられて、手紙やメールで現地の方とやりとりを行わせてもらっている学生も大勢います。

災害ボランティアの本質は労力提供ではなくコミュニケーションだと思っています。阪神・淡路大震災の経験からも、被災して傷つかれた方の最大のニーズは、自分の状況（苦境）を他者に理解してもらおうことだと言えるからです。労力や物資の提供も重要ですが、まず被災者と被災者、被災者とボランティア、ボランティアとボランティア同士が、創意工夫してコミュニケーションを取る関係があって、はじめて適切な支援の在り方について模索できます。そ

の上で労力や物資が提供されることが重要だと思っています。足湯ボランティアや「まけないぞう」は、そうしたコミュニケーションについての創意工夫の一例です。

東日本大震災からの復興はまだまだこれからで、被災地には長期的に関わっていかねばいけないと思います。そこで重要なのは、被災地のことを、被災した方々が受けた傷のことを、忘れないことです。「自分たちは忘れられていない、気にかけてくれる人がいる」と被災した方々が思えるかどうかは、一人ひとりが今後の生活を歩んで行く上で本質的に重要なことです。

今後も神戸から、定期的に学生ボランティアが行くことが「忘れていない」というメッセージを届けることとなります。これからも神戸大学遠野ボランティアバスの取組を続けていきますので、皆様方のご理解・ご支援をよろしくお願い致します。



# 海外との絆を深める

神戸大学では、ますます進む国際社会に対応できる人材を育成するために、教員、そして、学生に向けたさまざまな海外制度を設けています。

教員の制度としては、平成 21 年 9 月から「神戸大学若手教員長期海外派遣制度」を開始。教育研究活性化支援経費を用いて、平成 21 年度から平成 24 年度までの 4 年間で 60 名、原則 45 歳以下の優秀な若手教員を少なくとも 6 ヶ月以上海外へ派遣します。この制度は、教育研究のグローバル化が急速に進む中、国際競争力の向上、国際的に通用する教育研究内容・機会の提供が重要な課題となっており、次世代の教育研究を担う人材を育成するために新設されました。

また、学生に向けた制度としては、2011 年 3 月にオックスフォード大学との間に学術交流協定を結びました。留学生と触れ合う機会が増えることは、学生にとって大きな刺激となるでしょう。

このように、神戸大学で進められているさまざまな教育研究交流について、交流内容、ならびに体験記をご紹介します。

## 神戸オックスフォード日本学プログラム



ヘルツィヒ東洋学部長との調印式

神戸大学は2011年3月オックスフォード大学との間に学術交流協定を締結しました。併せて文学部はオックスフォード大学東洋学部と、「神戸オックスフォード日本学プログラム」に関する協定を結びました。

この協定によって、2012年10月からオックスフォード大学東洋学部2年次の日本学専攻学生12名全員が、神戸大学文学部で1年間学ぶこととなります。午前中は留学生センターで日本語を学習し、午後は文学部の授業を履修します。文学部の定員は1学年115名ですから、2年次生に限って言えば1割にあたる留学生が新たに加わることになります。

オックスフォード大学の日本学は、1964年に東洋学部内に正規のコースとして設置され、1980年には日産・日本文化インスティ

テュート現代日本研究所を傘下に加えて、現在に至っています。日本学の対象となる分野は、日本語・日本文学はもちろんのこと、日本の歴史、社会、思想、さらには日本経済史や日本経営学にも及んでいます。

外国で生活してその国の文化や風習にふれながら、さまざまなことを学んでいく留学は、学生にとってきわめて貴重な経験であって、より多くの学生が海外で学ぶ機会を得ることが望ましいのはいうまでもありません。しかし留学生が外国で学んでいるのと並行して、迎える側の学生もまたその留学生から多くのことを学んでいる事実にも気づくべきでしょう。留学生とともにいることで、「ヴァーチャル」な留学経験ができるわけです。その意味ではオックスフォード大学の学生を受け入れることで、神戸大学の学生もプチ留学をしていることとなります。



ハートフォードカレッジの中庭

オックスフォード大学では欧米の大学の例に漏れず、ふだんの授業中に与えられた課題をこなすために週末のほとんどの時間を費やすこともまれではないそうです。こうした留学生と日常接することによって、神戸大学の学生も勉学意欲がいつそう高まることが期待されます。

12名の学生の受け入れとは別に、神戸大学文学部とオックスフォード大学ハートフォードカレッジとの間で、毎年1名ずつの学生を相互に交換するプログラムも締結に向けて、目下準備を進めています。文学部から派遣した学生が、1年間オックスフォード大学で学ぶ機会ができ、たくさんものが得られるでしょうし、神戸大学のよさを彼の地で伝えることもできるでしょう。将来はこうした交流が全学部に広がることと思います。

(文学部長 釜谷 武志)



ハートフォードカレッジの外国人寮

## Je ne parle pas français. (私はフランス語を話しません)

理学研究科准教授 小手川 恒



グルノーブルの街

このたび幸運にも「若手教員長期海外派遣制度」に採択され、海外の研究機関で研究を行う機会を得ました。私が滞在したのはフランスのグルノーブルという町です。グルノーブルはスイスとイタリアの国境近くに位置しており、アルプスに続く山々を眺めることが出来ます。それほど大きな町ではありませんが、古くからフランスの研究拠点の一つとなっており、X線や中性子線を使った実験が可能な大型加速器もあります。私が滞在した研究所では、U(ウラン)などの放射性元素を含んだ物質の性質を調べる研究が行われており、私はそのような物質の磁性や超伝導の研究を行ってきました。放射性物質を扱うため、大学とは違い、警備員が門でチェックを行っており敷地内に入るためには登録カードの提示が必要になります。平日は19:00以降は出入り禁止で、土日は申請をしなければ建物に入ることは出来ません。このように書くとき重苦しい雰囲気の中で研究が行われ

ているように思われそうなのですが、決してそうではありません。程良い田舎のため空気はきれいで、時には現地の研究者たちと木々の茂る川沿いをランニングしましたし、時には芝生のグラウンドでサッカーもしました。フランス流の昼食はおいしく、とても満足できるものでした。普段とは違う環境で行う研究は新鮮で(もちろん研究内容自体もですが)、7ヶ月間の滞在期間を満喫してきました。

私はフランス語は全くと言っていいほど出来ない状態でフランスに行きました。研究所では英語でコミュニケーションを取りますし、大抵の店では片言のフランス語か英語で買い物もできます。しかしフランスでは街中で良く声を掛けられます(田舎だから?)。全く分からないフランス語を状況から推測すると、スーパーで買い物しているお婆さんから上の棚の商品を取ってくれだとか、公園で子供から今何時?と聞かれたりだとかはよくあるパターンで、自転車



近所のマルシェ

で地図を見ながら散策していると、道に迷ったのかと親切に詰め寄られたりともありました。よく使ったフランス語の一つは「Je ne parle pas français. (私はフランス語を話しません)」であることは間違いありません。子供達の大人に対する警戒心のなさは日本には無いもので驚きでしたし、面白かったのは、フランスには移民が多いため、大人を含めて彼らには私が外国人に見えていないということでした。

詳しく触れることは出来ませんでした。研究の上でも大きな収穫がありました。そして研究以外の点でも良い経験をしたことは疑いもありません。私は35歳でこのような機会を得ましたが、多くを吸収するためには若い時の方が良い点はたくさんあります。ぜひ学生の皆さんもそのようなチャンスがあれば積極的にトライして欲しいと思います。



研究所から見える山々

## アメリカの大学の魅力とは

国際協力研究科教授 木村 幹



スザーロ図書館、ワシントン大学のシンボリックな建物

例えば、「世界大学ランキング」のようなものを見てみよう。そこにずらりと並んでいるのは、アメリカの大学だ。例えば、最も頻繁に引用されるTimes世界大学ランキングのトップ20のうち、アメリカの大学は15をも占めている。アメリカの凋落が言われて久しい今日でさえ、大学の世界では、アメリカは圧倒的だ。その強さの秘訣は一体何処にあるのだろうか。

こういふと、我々の目は時にハーヴァード大学のような超一流校に向かいがちだ。しかし、それではアメリカの大学の強さはわからない。アメリカの大学の本当の強さは、国内20位の大学でさえ、その評価が東京大学を上回る、その層の厚さにこそある。

筆者が昨年1年間、客員研究員として滞在したワシントン大学は、そんな「東京大学を上回る」評価を受ける大学の一つである。「ワシントン」大学といっても、首都、ワシントンDCにではなく、西海岸「ワシントン州」にある州立大学だ。イチローがいるマリナーズの本拠地があるシアトルの大学、といえはわかりやすい。

因みにこのワシントン大学は、神戸大学の提携校でもある。背後には神戸がシアトルと、兵庫県がワシントン州と各々姉妹自治体提携を結んでいることがある。実際、シアトルと神戸、ワシントン



キャンパスよりレーニエ山を望む

州と兵庫県は、都市圏の規模や人口もさほど変わらない。

しかし、ワシントン大学の存在感は神戸大学とは比べ物にならない。原因の一つは、シアトルの街に出ればすぐわかる。街には、必ずワシントン大学のシンボルマークである「W」の文字がついた紫色のTシャツを着た人達が歩いている。そ

れはこの街の人々が如何にこの大学に親しんでいるかを表している。その事は、スポーツイベントの際には、より明確になる。例えば、この大学は7万人を収容する「ハスキースタジアム」を所持しているが、アメリカン・フットボールの試合の時には、紫色のウェアを来た大学のチームを応援する観客で満員になる。マリナーズの試合は何時もがらから、逆にその人気がどれだけ大きいか分かる。

そして、アメリカにはこんな大学が各地域に無数に存在する。地域に愛される大学で、地域と密着しながら世界最高水準の勉強ができる。ついでに、メジャーリーグやNFLも観戦出来るし、広大な大自然も目の前にある。アメリカの大学はだからこそ魅力的だ。えり好みをせずに、一度その贅沢な魅力を是非多くの人に直接味わって欲しい、と思う。



アメリカン・フットボール試合開始前のパレード風景

## 英国流お茶を飲んで、研究を楽しむ

人間発達環境学研究科教授 近江戸 伸子



研究室の皆とランチタイム

平成22年度神戸大学若手教員長期海外派遣制度により、平成22年4月29日～平成22年12月28日に、イギリスで研究ならびに研修をおこないました。

イースト・アングリア地方と呼ばれるロンドンから東に2時間ばかり行ったところの、東端のノーリッチ市にいました。ここは小さな町で、人口13万人、つまり神戸市の10分の1くらいです。神戸大学がダブルディグリー制度で、学術交流協定しているイースト・アングリア大学もあって、神戸大学とはゆかりの田園学術都市です。私の滞在したジョン・イネス研究所は植物科学の分野で、英国の最先端の研究所です。研究所には、500名くらいの人のコスモポリタンが所属していて、日本人研究者は6名いました。

私の研究テーマは、「環境により変動する植物エピゲノムに関する研究」です。植物にとって低温により開花が誘導される春化は、まさしく“植物の記憶”です。春に花芽形成するチューリップ、ナズナなどの植物にとって、冬季の低温を経験するのは必

須です。春化現象は、多くの分子が要因となり、複雑に絡み合って機能することが知られています。私の研究では、温度という環境変動を受け、柔軟に応答する春化遺伝子は、従来の制御の要因とされるタンパク質修飾や複合体の蓄積に加えて、細胞核内の遺伝子配置が関連していることを証明しました。

ジョン・イネス研究所では、午前・午後とも30分程度、コーヒーやお茶を飲むのが習慣でした。セルフサービスのTeaルームが、4か所もあります。私は、他国の研究者と交流することが目的なので、なるべく参加して話すようにしていました。夏には芝生の上で、研究室のメンバーとおしゃべりしながらお茶を飲んでいました。雑談の中で、同僚の価値観や、ボスの研究方針や戦略をざっくばらんに聞いて、英語でのコミュニケーションが億劫でなくなります。また心に余裕が生まれ、失敗のない仕事につながります。この時間に、研究の進捗状況を、私から話すようにしておくと、信頼関係が生まれます。おかげで滞在した8か月間で、ボスのほうから研究はどうなっているのか?と聞かれることは一度もなかったです。

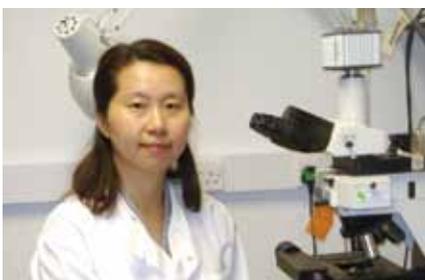
6月中旬私のアパートで、House warming (引越し) パーティを開きました。寿司や蕎麦を作りました。海外で信頼を得るのは、オープン・マインドです。ヨーロッパの大学

院生は、生活費がすべて出るので貧しいながらも独立した生活ができます。日本は全体的にデフレですが、イギリスはそれほどでもないです。VATとよばれる消費税は20%です。しかし、食品にはほとんどつかないので、低収入者や年金者が基本的な生活をするためには便利です。とくに、医療費がほとんど無料なので、これは大きいです。幸い1度だけしか病院には行きませんでした。GPと呼ばれる地域登録制の医師にあらかじめ登録しておくとはほとんど無料でみてもらえました。職場の就労証明書は必要です。イギリスに留学する人は、健康保険は必要ないかもしれません。

7月1～8日にチェコのプラハでの実験生物学会に出席し、口頭発表してきました。学会では、女性研究者の夕食会に参加しましたが、ヨーロッパも決して若い女性研究者たちにとって良い状況ではないようです。神戸大学は、昨年より「女性研究者養成システム改革事業」に取り組んでいます。神戸大学から女性研究者がもっと活躍できるようにとできればと希望しています。



国際学会での女性研究者の集い



実験室にて

# 女性研究者 NOW

神戸大学の女子学生の比率は33.3%、女性教員の比率は13.0% (2011年5月現在) と、未だに高等教育機関における女性は、マイノリティー (少数派) です。

男女共同参画推進室では、科学技術振興調整費を受託し、女性教員比率と研究環境の向上をめざし、とりわけ女性教員の比率が低い理学・工学・農学系を対象に、理系研究科に6名の女性教員を採用しました。また、研究費支援により国際学会での発表機会も増えています。

このような支援を通じて、男女共同参画推進室は、神戸大学のダイバーシティや研究環境の整備を促進し、より活力ある大学への発展に寄与しています。今回はその成果として、理系女性教員の活躍と研究内容についてご紹介します。

## TOPICS

### 相馬 芳枝 (特別顧問)

#### 特別顧問が女性科学賞を受賞

今年はキュリー夫人のノーベル化学賞受賞から100年目に当たることから「世界化学年」(International Year of Chemistry: IYC 2011) とされ、化学の研究や普及で優れた業績をあげた世界の女性化学者に女性化学賞が授与されました。神戸大学の相馬芳枝・特別顧問は、この賞に日本でただ1人選ばれ(16カ国23人が受賞)、8月2日プエルトリコでの授賞式に出席しました。

相馬特別顧問は1965年、神戸大学理学部化学科を卒業。通産省大阪工業技術試験所(現産業技術総合研究所)に入所し、



## 食えることが大好きでした

私は現在、農学研究科附属の「食の安全・安心科学センター」の専任助教として、食品の機能性や安全性の教育研究に携わっています。具体的に言いますと、食品が私たちの体に及ぼす影響について、培養細胞や実験動物を使って詳しく調べることで明らかにしようとしています。皆さんご存知のように食べ物と私たちの生活は密接につながっていて、私は何より食えることが大好きだったので、食と健康に関する研究がしたいと思ったのが現在の研究を始めたきっかけです。

研究の醍醐味としては、やはり、自分の知りたいことや疑問に思ったことについて、実験というアプローチで明らかにして、それを論文や学会で発表することだと思います。理系研究者という毎日常験しているイメージがあるかもしれませんが、実際には論文で研究成果を発表することが自分の実績を証明する上で最も重要だと言えますから、作文能力が必要となります。さらに、自分の研究成果は国内にとどまらず、広く海外にも発信

していかなければなりませんし、国際学会ではもちろん英語で発表することになりますから、英語で論述する能力が必要です。だからと言って、特別な能力が必要なわけではなく、それなりのトレーニングを積めば誰しもができることだと思いますので、研究職に興味のある方はぜひその扉をゆっくりでいいので、開いてほしいと思います。

女性研究者というくくりでみると、キャリア重視のイメージがあるかもしれませんが、私は一般就職者と変わらないごくごく普通の生活を送っています。個

## 福田伊津子 (農学研究科・助教)

人的なことですが昨年4月に出産し、そのために産前6週間と産後8週間の産休と、およそ9ヶ月の育休を取得しました。今年4月に職場復帰後は、家族はもとより研究室スタッフや学生さんの理解と協力を得て、子供を保育園に預けながら研究をしています。正直なところ、家事・育児と研究の両立は時間的にも体力的にも厳しいところがありますが、精一杯できるだけのことはするという姿勢で、精神的には充実していてやりがいを感じます。学生の皆さんも、一日一日を大切に、充実した学生生活を過ごしてください。



農学研究科生物機能開発化学教育研究分野のメンバーと、後列右から3番目が筆者



銅カルボニル触媒を代表とする新しいカチオン型金属カルボニル触媒を発見しました。

また、男女共同参画の推進にも貢献。2002年には日本化学会の男女共同参画推進委員会を立ち上げ、初代委員長を務めました。さらに、理工系の68学協会が加盟する男女共同参画学協会連絡会の発足・運営に尽力し、第3期委員長を務めました。5年前からは「女子中高生のための関西科学塾」の実行委員長等を務め、科学や科学研究の魅力を語ったり、理系

を目指す女子中高生を励ましたりしています。

記者会見では、「好きであれば大抵のことはできる」、今後は、「男女を問わず、若い研究者を励ます仕事がしたい。『あのおばさんでも出来るなら、私たちはもっと出来るよね』と思ってもらえれば」と笑顔で語りました。

詳しくは、下記URLでご覧いただけます。

[http://www.kobe-u.ac.jp/info/topics/t2011\\_06\\_17\\_01.htm](http://www.kobe-u.ac.jp/info/topics/t2011_06_17_01.htm)

## 小さな脳の仕組みを解き明かす

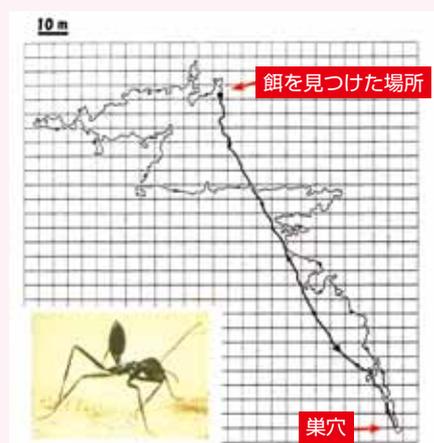
佐倉 緑 (理学研究科・講師)

平成23年1月に生物学専攻の講師として着任しました。研究室の実験環境も徐々に整いつつあり、これからの研究の展開にいろいろと思いを馳せる毎日です。

昆虫や軟体動物などの無脊椎動物はその単純な神経系にも関わらず、学習やナビゲーションなど、驚くほど複雑な行動を示します。わずか1ミリ四方の小さな脳でどのようにそれらを実現しているのだろうか？そこには、我々の大きな脳とは全く異なる情報処理の仕組みがあるのだろうか？そんなことに興味を持っています。大学院を卒業した後、スイスのチューリッヒ大学に留学する機会を得て、昆虫のナビゲーションの研究を始め

ました。アリやミツバチなどの社会性昆虫は、時に数キロ以上も餌を探して移動しますが、迷うことなく最短距離を一直線に巣まで戻ってきます。このナビゲーション行動は非常に優れた空間知覚能力と場所記憶能力に基づいています。これまでに、脳の一部がコンパス（方位磁石）の様な働きをして、常に自分の向いている方向を頭の中で計算していることが明らかになってきました。このコンパスの仕組みを調べることで、GPSが使えないような状況、例えば災害時の捜索や惑星探査などに利用できるナビゲーションシステムに応用できるのではないかと期待しています。ここ数年はミツバチを実験材料として使っています。花のありかを巣仲間教える「8の字ダンス」はとても有名ですが、それだけでなく、時々刻々と変化する蜜源に適応して効率よく花を移動する能力には本当に驚かされます。

こんな研究をしていると、「虫の研究をして何の役に立つの？」という質問をよく受けます。確かに、新しい技術開発



サハラ砂漠でのサバクアリの採餌航行の軌跡復路(太線)は一直線に巣に戻る (Wehner&Wehner1990より改変)

にすぐには結び付かない基礎研究が世の中にはたくさんあります。もちろん、全ての研究には意味があるのですが、それだけでなく、純粋にわくわくしたり、不思議に思ったりする気持ちを大切にしたいと思います。現在の最先端の技術は、過去の膨大な基礎研究の土台の上に成り立っている、そのことを忘れずにいたいと思います。



スイスの研究室の女性研究者、女子学生達との写真



# サークル活動満開 「躍動、感動」

神戸大学のサークル活動（課外活動）は、文化総部31、体育会50、応援団総部2、学生会9、サークル連合9、その他団体4の計105の多彩な集団が活動しています。

学生らしい、和気あいあいとした雰囲気の中で活動するサークルの中には、熱心な活動によって優れた実績を残す伝統的なサークルも多数あります。

今回は、このような神戸大学のサークルの中から、個性的な活動を展開する3つのサークルを紹介したいと思います。

## 男子端艇（カッター）部



こんにちは、男子端艇(カッター)部です。皆さんは、カッターをご存じですか？カッターは、艇長・艇指揮、そして漕ぎ手12人の計14人により、全長9mの艇を1000m折り返し、計2000mを漕ぐ競技(The King of Marine Sports)です。

大会は、5月の『全日本カッター競技大会』と11月の『西日本新人カッター競技大会』があり、今年(2011年)5月、芦屋浜沖での全日本大会では、敗者復活戦で昨年覇者の防衛大学校に競り勝ち、決勝に進出。しかし、海上保安大学校に10秒差、惜敗の準優勝となりました。優勝を逃した悔しさが残る結果で、来年の雪辱に燃えています。今年は、創部(昭和27年・1952年)以来60期目の節目

の年ですが、新入部員が近年最多の13人入部しました。この勢いで、今年こそ海保大にリベンジ、そして、悲願の優勝を達成したいです！

また、私たちはただ漕ぐだけではなく、瀬戸内海を帆走で巡る約2週間に及ぶ魅力的なトレーニングによって、風の力を利用した巡航も満喫します。今年は香川県小豆島までの往復航海です。団体競技ということもあり、みんな仲良く活動しています。ホームページ(「全日本カッター連盟」検索→学校紹介→神戸大学)もありますので、ぜひご覧ください。そして、実際に漕ぎに来てください!!最後に、遅いマネージャーも募集しています!!!

## 女子端艇（カッター）部

カッターと聞くと、ほとんどの人がカッターナイフやカッターシャツを思い描き、「なんだ、それ?」と思うのではないのでしょうか?カッターとは、船に搭載する救命艇を原型にしたもので、海に通じた人であれば誰もが知る大型の手漕ぎボートです。

女子カッター競技では、全長6メートルのカッターに左右それぞれ3人ずつ、計6人がオールを握り、これに艇指揮と艇長が加わった総勢8人でクルーを構成します。女子の正式レースでは1,000メートルの直線距離を漕ぎ、その速さ(順位)を競います。

海という大自然の中では全員の心を一にし、艇指揮の号令に6本のオールをぴったり合わせる事が強く要求され、過酷ながらも奥が深く、とても力強いマリンスポーツです。

現在、部員9人で活動していますが、今年の5月に開催された「第33回神戸港カッターレース」及び「第55回全日本カッター競技大会」では、いずれも優勝することができました。次は、11月に開催される「第57回西日本新人カッター競技大会」での優勝目指して、日々練習に励んでいます。

部員はみんな仲良く、わいわい楽しくチームを盛り上げています。皆さんも、ぜひ、私たちの一員になってみませんか?





## タッチフットボール部

私たちROOKS(ルークス)は、タッチフットボールという競技の女子チームです。タッチフットボールとは、アメリカンフットボールからタックルをなくしてタッチに変えた、女子でも安全に楽しめるスポーツです。

このスポーツには、走る、投げる、キャッチする、蹴るといったたくさんの要素があるので、どれかひとつでもできれば、誰でも輝けること間違いなしです！現在所属している部員は、もちろんみんな未経験からのスタートですが、今ではタッチフットの魅力にはまっています。

今、私たちが目指しているのは「日本一」です!! 昨年度は苦しい時期を何とか乗り越

え、10年ぶりの日本一を達成しました！今年は、また新たな気持ちで、「挑戦者」として連覇に向け日々練習しています。今年度の成績は、関西学生女子春季トーナメント優勝、シュガーボウル(全国大会)第三位となっています。1回生から4回生まで本当に仲良しで、練習には真剣に取り組めますが、オフには一緒に遊びに行ったりもします。

ホームページ <http://home.kobe-u.com/rooks/> (「ROOKS」で検索)もぜひご覧ください！

大学に入ったら新しいことを始めたいと思っている皆さん、ROOKSで最高の仲間と一緒に、「日本一」を目指しませんか？



## 自由劇場

神戸大学演劇部自由劇場、通称「JIGEKI」。ハイテンション・ハイテンポで、場内のボルテージを上げ続けるパワフルなエンタメ芝居を得意とする傍ら、シュールに、リリックに、ハートフルに、ナンセンス、シェイクスピア、会話劇など、幅広いテイストとジャンルにわたるパフォーマンスを行う劇団です。創部から35年を迎えた今年、公演ごとに増え続けた部員数は、60名を超えました。芝居のクオリティに対するあくなき探究心を糧に、日々演劇活動に取り組んでいます。

年間5〜6回の本公演を行い、長期休暇

にも企画公演を行い、とにかく芝居が大好きな集団です。でも、部員のほとんどは演劇初心者で、運動部出身者もたくさんいます。それぞれが持っているスキルはさまざまですが、芝居で活躍するのは役者だけではありません。舞台を作る大道具はもちろん、音や光、衣装に宣伝…さまざまなスタッフも加わり、部員一丸となってよりお客様に楽しんでいただける芝居を作っています。

所属・年齢・国籍は問いません。一緒に芝居がしたいという

人は大歓迎！ぜひ一度、騙されたと思って公演を観に来て下さい。詳細はホームページ (<http://home.kobe-u.com/jigeki>) を！私たちと一緒に熱い舞台を作りませんか？



## 課外活動団体 (公認) 一覧 (平成23年6月1日現在)

### 文化総部 31

児童文化研究会/演劇研究会/男声合唱団グリークラブ/混声合唱団エルデ/混声合唱団アポロン/マンドリンクラブ/写真部/能楽部/E. S. S./I. S. A./ユースホステルクラブ/将棋部/茶華道部/文芸研究会/軽音楽部/探検部/天文研究会/クラシックギター部/邦楽部/児童文学研究会/競技ダンス部/考古学研究会/自由劇場/交響楽団/映画研究部/漫画研究会/ニュースネット委員会/落語研究会/凌美会/ガーデニングクラブ/ブルーグラスサークル

### 応援団総部 2

応援団/吹奏楽部

### 学生会 9

国際問題研究会/経営学研究会/法律相談部/アイセック/書道研究会/コンピュータ部/総合ボランティアセンター/TRUSS(トラス)/就職活動支援組織 job-navi

### 体育会 50

陸上競技部/水泳部/硬式野球部/準硬式野球部/硬式庭球部/ソフトテニス部/男子バスケットボール部/女子バスケットボール部/ハンドボール部/ラグビー部/サッカー部/ホッケー部/男子バレーボール部/女子バレーボール部/卓球部/バドミントン部/剣道部/弓道部/洋弓部/柔道部/空手道部/馬術部/山岳部/ワンダーフォーゲル部/スケート部/漕艇部/ヨット部/自動車部/日本拳法部/少林寺拳法部/スキー部/合気道部/航空部/ゴルフ部/フェンシング部/体操部/アメリカンフットボール部/サイクリング部/ソフトボール部/カヌー部/ウインドサーフィン部/アイスホッケー部/ラクロス部/極真空手部/フットサル部/居合道部/男子端艇部/女子端艇部/スノーボード部/海事科学部硬式野球部

### サークル連合 9

サッカー部(II)/軟式(準硬)野球部(II)/バドミントン部(II)/軽音楽部(II)/硬式テニス部(II)/バレーボール部(II)/バスケットボール部(II)/フットサル部(II)/学生震災救援隊

### その他団体 4

新聞会/放送委員会/六甲祭実行委員会/厳夜祭実行委員会

## 「欧州神戸大学同窓会」 Kobe University Alumni Association in Europe が発足



### ブリュッセルオフィス発：欧州で拡大するネットワーク

2011年3月、「欧州神戸大学同窓会」発足式が神戸大学ブリュッセルオフィスで開催されました。9番目となる今回の海外同窓会は、昨年9月に開所した「神戸大学ブリュッセルオフィス」のオープニング記念シンポジウムの開催に合わせて発足したもので、福田秀樹学長をはじめ、卒業生、在学生、大学関係者など30人が集い、その第一歩を踏み出しました。

福田学長は、記念講演の中で、EUの本拠地であるブリュッセルに事務所を構えたのは日本の大学では初めての試みで、EUへの強力な情報発信になることは確実であり、この度の同窓会発足でそれがさらにパワーアップするものと思う、と述べられました。

本学が欧州で教育・研究活動を積極的に推し進め、ブリュッセルオフィスで蒔かれた欧州同窓会の種が域内で大きく成長しネットワークが拡大し、母校のプレゼンスが高まることを期待しています。

### 国際的な知的人材の宝庫をつなぐしくみ

#### －海外ネットワーク構築事業 (KU International Alumni-Net)－

神戸大学では、2001年から留学生センターを中心に、海外在住の卒業生（日本人／留学生）と本学との絆をより緊密にするために「海外ネットワーク構築事業」に取り組んできました。2011年8月現在、海外9つの国／地域（韓国、台湾、中国、ベトナム、インドネシア、タイ、マレーシア、シンガポール、欧州）に海外同窓会を拠点とするネットワークが実現しています。また、中国・北京には「神戸大学中国事務所」（2008年）があり、欧州には、EUの本拠地であるブリュッセルに「神戸大学ブリュッセルオフィス」（2010年）が開設されました。

本学は百余年にわたって蓄えた知的人材の宝庫に支えられていますが、1949年に神戸大学として新生し、留学生について言えば、1953年にタイから最初の留学生を受け入れて以

来、現在まで、約5,000人の国際的な知的人材を国内外に送り出しています。卒業留学生のフォローアップ事業の目的は、卒業生と共に歩み、世界中のあらゆる分野で活躍する卒業生と母校が連携・協力し互恵的な関係を創ることでしょう。今後、150,000人ももの豊かな知的人材を擁する「学友会」（11学部の同窓会組織の連合体）ともしっかり連携すれば、より大きな力になると期待されます。

### 飛翔－KOBEから世界へ

国際的に人の移動が日常化しているグローバル社会においては、世界に広がりをもつネットワーク力が大きな役割を果たすのは必至であり、その基盤となるのが、「知の循環」を創出する「海外ネットワーク構築事業」とも言えるでしょう。欧州と言え、広範囲で国籍や文化も多様であるからこそ、「海外ネットワーク構築事業」の理念ともいえるべき「学籍でつながる関係」がますます重要になってきます。今後も、同窓の方々とも連携協力して本学が世界へと大きく飛翔する拠点として、北米、オセアニアをはじめ、世界中にネットワークが拡大・強化することを願っております。

（留学生センター顧問 瀬口郁子・神戸大学名誉教授）

### 海外同窓会ネットワーク一覧

名称	発足 / 連携年
神戸大学在韓総同門会 (ソウル)	1986
神戸大学台湾校友会 (台北)	1996
中国神戸大学同窓会 (北京) 大連地区・北京地区・上海華東地区・広東香港地区	2006
ベトナム神戸大学同窓会 (ハノイ) ハノイ地区・ホーチミン地区	2008
インドネシア神戸大学同窓会 (ジャカルタ) ジャカルタ・バンドン地区ほか4地区	2008
タイ神戸大学同窓会 (バンコク)	2009
マレーシア神戸大学同窓会 (クアラルンプール)	2010
シンガポール神戸大学同窓会	2010
欧州神戸大学同窓会 (ブリュッセル)	2011

## 2011年度「育友会全学懇談会」を開催しました

2011年度の神戸大学育友会全学懇談会を6月11日、出光佐三記念六甲台講堂にて開催しました。当日は大雨の予報にもかかわらず、お昼前には雨も上がり、ご家族で来学される保護者等も多く、約350人の新生保護者等の皆さまが出席されました。

最初に育友会を代表し、岡部禎久新理事長から育友会の目的・事業について説明があり、「今後もどのような形で神戸大学の発展に寄与することができるかを、皆さまと一緒に検討、実現していきたいと考えますので、これからは育友会事業へのご協力をお願いしたい。」との挨拶がありました。

続いて、福田秀樹学長から、最近の神戸大学の歩みについて報告の後、育友会の皆さまに今後の支援のお願いがありました。また田中康秀副学長（教育担当）から「大学教育について」と題し、本学の教育組織・教育ビジョン・今、大学教育に求められているもの・教育の実践について、続いて、内田正博キャリアセンター長から「就職状況について」と題し配付資料の説明及び神戸大学の就職状況についての話がありました。最後に、石田廣史副学長（学生・入試・広報担当）の紹介で、学生ボランティア支援室の藤室玲治コーディネーターから、「東日本大震災への対応について」と題し、4月30日から5月8日の日程で実施された



神戸大学遠野ボランティアバスの活動報告がありました。また、先に行われた理事会にて育友会から学生ボランティア支援室へ、今後のボランティア活動バス借り上げ代の援助が決定されたことへのお礼を述べ、閉会となりました。

全学懇談会終了後は、各学部にて会場を移動し、学部別懇談会が開催されました。各学部とも学生生活、進路・就職状況について質疑応答があり、熱心な意見交換がされました。

（教育支援課）

## 「硬式野球部100年史」出版記念パーティーを開催しました

さあ、次の100年へー。神戸大学硬式野球部の100年の歴史をまとめた「凌霜野球クラブ 100年のあゆみ」が出版されたことを記念し、6月11日に出版記念パーティーが開かれ、OB、現役選手など約110名が出席、またライバル校の大阪府立大学硬式野球部のOB会長や神戸大学応援団総部初代団長らもかけつけ、それぞれの時代を支えたプレーヤーたちが思い出を語りあいました。

「長い歴史を持ちながら部史がない。100年史をぜひ作りたい」。そう思い立ったOBが、5年ほど前から資料を集め始めたのが出版のきっかけで、昨年春に、編集委員会（帯谷憲治委員長）が発足。各年代の代表者に原稿執筆を依頼するなどの苦労を重ね、今年2月に完成しました。

「100年のあゆみ」は、A4判の161ページ。それによると、野球部は明治36（1903年）年、前身校である神戸高等商業学校時代に創部。最初の対戦相手は、神戸港に入港した米艦アナポリス2号チームで、5対23で大敗したそうです。

各年代の代表者によるエピソードも満載で、平成7（1995）年の阪神・淡路大震災当時、六甲台グラウンドは自衛隊の基地となったため、OBの協力で練習用グラウンドを手配し、なんとか迎えた春季リーグ戦の強豪・阪南大戦では、延長19回の激闘を制しました。執筆した破魔英樹さん（平成8年卒）は「震災で野球部の活動が多くの先輩方に支えられていることを改めて痛感した」とつぶっています。

パーティーでは、新田英世・神戸大学硬式野球部OB会長が



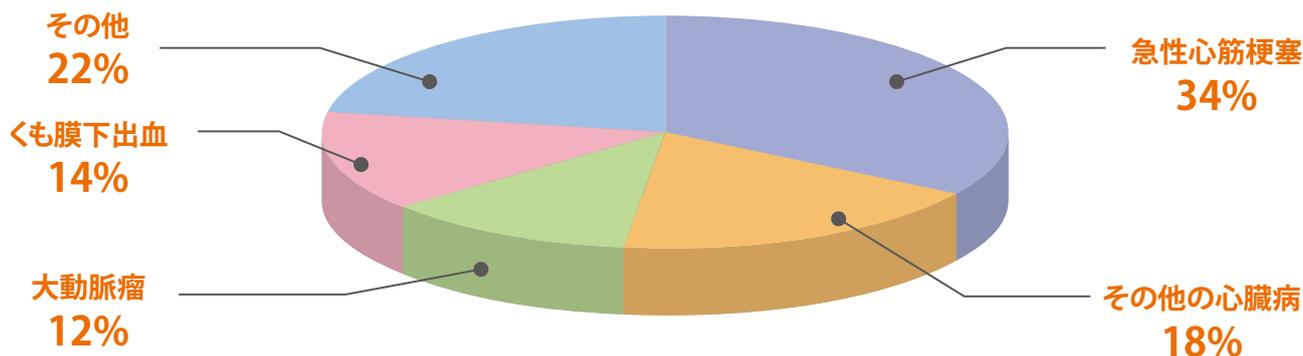
「皆さまのおかげで100周年を迎えることができ、100年史出版が次の100年へのスタートになることを願いたい」と挨拶、続いて福田秀樹・神戸大学学長が祝辞を述べました。OBからは、昨春に2部に降格して以来、1部復帰が果たせていないことに話題が集まり、「伝統ある野球部がこのまま2部で安定するのではなく、1部に上がって、さらに上位を目指して」など、現役に対して激励や注文が相次ぎました。その一方で、「勝負事は難しい、いろいろ言われるかも知れないが、仲間を大切にして青春を謳歌してほしい」と、エールを送る言葉もありました。田中久登主将は「先輩方のためにも、早く1部に復帰できるようがんばります」と決意を述べました。

（硬式野球部 総監督 高田義弘・人間発達環境学研究科准教授）



## 心臓突然死！・・・防ごう基礎疾患の早期発見で。

現役プロサッカー選手の心筋梗塞による練習中の突然死は大きな衝撃をもって伝えられました。こうした突然死による死亡者は日本で年間約 10 万人と推計され、その約半数が心臓疾患による心臓突然死です (図1)。



(図1) 日本における突然死の原因疾患 (参考 1 より改変)

### 心臓突然死はなぜ起こる？

心臓突然死の原因としては狭心症や急性心筋梗塞といった虚血性心疾患、肥大型心筋症、Brugada (ブルガダ) 症候群などが知られ、いずれも多くは致死性の不整脈である「心室細動」を起こして死に至るとされています。また、健康な人でも野球やサッカーなどで強いボールが胸に当たったり、アイスホッケーやラグビーなどで強い衝撃が胸に加わると「心室細動」を起こし、死亡することがあります。

### 心臓が血液を送り出せない「心室細動」

心臓は 4 つの部屋 (右心房、右心室、左心房、左心室) からできていて、通常は規則的に収縮・拡張を繰り返して、脳をはじめとする全身の臓器に血液を送り出しています。心室細動が起こると心室が小刻みに震えた状態になり、心臓がしっかり収縮できないために血液を送り出すことができません。このような状態が 10 秒以上続くと意識が失われ、数分続くと脳死に至ります。

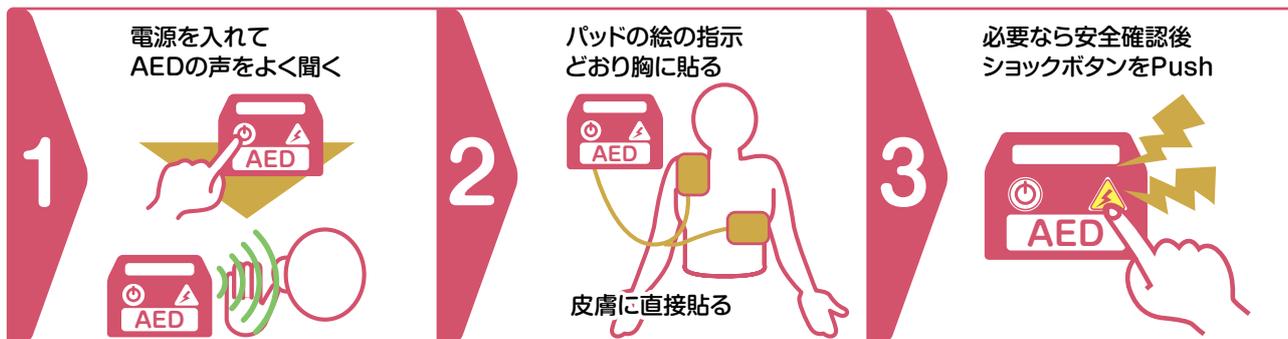
### 心臓突然死を救う AED !

心室細動は電気ショックによって回復させることができます。心肺停止状態になってからの救命率は 1 分経過する毎に 10% ずつ減少するとされ、速やかな心肺蘇生が望まれます。心臓マッサージの開始とともに、AED と

救急車の手配をすることが大切です。AED の電極パッドを胸部に貼ると、心室細動など電気ショックが必要な時には AED が音声で指示してくれますので、ボタンを押すだけで心臓に電気ショックをかけることができます (図2)。なお、一般市民による心肺蘇生では人工呼吸を行っても救命率が增加しないことが明らかになり、最新の心肺蘇生ガイドラインでは一般市民による人工呼吸は行わなくても良いとされています。



(図2) AED (上) と AED の操作手順 (右上) (参考 6・7 より改変)



## 虚血性心疾患、肥大型心筋症、Brugada 症候群

心臓突然死の原因となる基礎疾患の中で最も多いのは虚血性心疾患(狭心症、急性心筋梗塞)です(図1)。心臓そのものに酸素や栄養を供給している血管(冠動脈)が狭窄したり閉塞したりし、心臓が酸素不足の状態に陥るものです。狭窄によって一時的に酸素不足が生じているものを狭心症、閉塞による持続的な酸素不足で心臓の細胞(心筋)が死んでしまったものを心筋梗塞といいます。特徴的な症状は胸の中央部の痛みや圧迫感ですが、左肩や腕に痛みが広がることもあります。

肥大型心筋症は、その名のごとく心筋の肥大をきたす疾患で、遺伝的な素因が関与しているとされ、若年者の心臓突然死の原因としても多く見られます。自覚症状がないこともありますが、動悸、胸痛、呼吸困難などをきたすこともあります。

Brugada 症候群も遺伝的な素因が関与している疾患で、心電図検査で特徴的な所見(右脚ブロック様波形、右側胸部誘導における特有なST上昇)を呈します。夜間睡眠中に心室細動を起こしやすく、夜間の突然死の原因として注目されています。心室細動を起こさないかぎりは無症状で、健康診断における心電図検査で偶然発見されることが多い(健康診断受検者の0.1~0.3%程度)とされています。

## 心電図検査と胸部 X 線撮影検査で基礎疾患を知る

心臓突然死の原因となる虚血性心疾患や、肥大型心筋症、Brugada 症候群などの心疾患は心電図検査や胸部 X 線撮影検査で早期に発見することができます。

神戸大学では定期健康診断において胸部 X 線撮影検査を毎年実施するとともに、全ての新生入生と新規採用職員、20・25・30・35・40 歳以上の職員を対象として心電図検査を実施しています。心臓突然死の予防のために、毎年の定期健康診断を必ず受検してください。早期に発見すれば、生活習慣の改善、日常生活や運動における留意、疾患によっては早期治療に繋げることができます。自覚症状がある場合には「からだの健康相談」を利用してください。また、神戸大学には楠地区(医学部医学科、医学研究科、附属病院)の37

台以外にも学内 42 箇所に 44 台の AED(平成 23 年 9 月現在)が設置されています。設置場所は神戸大学ホームページ(<http://www.kobe-u.ac.jp>)のキャンパスマップにも表示されています。日頃から設置場所を確認し、救命処置に役立ててください。心臓突然死をなくすために・・・。

### 参 考

- 野々木宏: 心臓突然死 発生場所・原因と頻度, 心臓 41(7): 856-858, 2009
- 財団法人日本心臓財団ホームページ(<http://www.jhf.or.jp/>)
- 日本循環器学会: 心臓突然死の予知と予防法のガイドライン(2010年改訂版)
- 日本循環器学会: 虚血性心疾患の一次予防ガイドライン(2006年改訂版)
- 池主雅臣, 他: [心電図トピックス] 致死性不整脈発生の予測因子ブルガダ(Brugada)型心電図, Medical Technology 37(11): 1187-1191, 2009
- 保健管理センターだより KOBE university STYLE 10: 19-20, 2008
- 日本循環器学会ホームページ(<http://www.j-circ.or.jp/shinpaisosei/index.html>)

## 保健管理センターは・・・

六甲台キャンパス(本部管理棟2階)と深江キャンパス、楠キャンパスにあり、毎年の健康診断やその結果に基づく再検査・精密検査をはじめ、日常の救急処置、健康相談(「からだの健康相談」、「こころの健康相談」)、保健指導、栄養指導、健康教育、産業医活動、調査研究活動などを通じて、学生や職員の皆さんの健康をサポートしています。また、名谷キャンパスには「からだの健康相談」のための保健管理室と「こころの健康相談」室が設置されています。

### ● お問い合わせ

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1  
 [神戸大学保健管理センター] ☎ 078-803-5245  
 〒658-0022 神戸市東灘区深江南町 5-1-1  
 [神戸大学保健管理センター深江分室] ☎ 078-431-6232  
 〒650-0017 神戸市中央区楠町 7-5-1  
 [神戸大学保健管理センター楠分室] ☎ 078-382-5006

### ● 保健管理センターだより 79

(神戸大学広報誌「六甲ひろば」から引き続き連載)  
 保健管理センターの詳細につきましては、  
 保健管理センターホームページでも案内しています。  
<http://www.kobe-u.ac.jp/medicalc/index-j.html>

## 神戸大学のキャンパス〈その3〉

## 楠地区

神戸大学キャンパスは4つの地区に分かれている。いずれも神戸市内にあり、六甲台地区、楠地区、名谷地区、深江地区と称される。今回はその一つ、楠地区を取り上げてみたい。

## ■ 学内最古のキャンパス

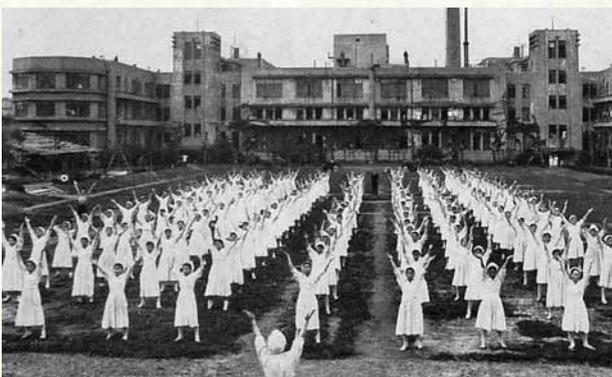
楠地区は、110年以上の歴史を有する学内最古\*のキャンパスである。その歴史は1900(明治33)年に医学部附属病院の前身である兵庫県立神戸病院がこの地に移転したことから始まる。現在は医学研究科、医学部医学科及び医学部附属病院が設置され、土地面積48,518㎡(内39,854㎡が附属病院)を有する。神戸市中央区楠町7丁目に位置し、最寄りの神戸市営地下鉄「大倉山」駅から徒歩約5分、JR「神戸」駅、神戸高速鉄道「高速神戸」駅から徒歩約15分の距離にある。

## ■ 誕生

楠地区の歴史の始まりは110有余年前にさかのぼる。当時ここは神戸市湊東区楠町と称され、1883(明治16)年廃止の大坂砲兵隊兵庫分営(通称「鎮台屋敷」)の広い跡地が横たわっていた。この土地は大倉財閥の創立者大倉喜八郎が所有しており、東に隣接する丘陵(安養寺の寺院と墓地があり当時安養寺山と称した。大倉の別荘もあった)を含めて「大倉山」と俗称された。

1896(明治29)年10月、大倉は、旧鎮台屋敷跡の土地を、商業学校設置を条件として兵庫県に寄付。県はその敷地西側3分の1に県立神戸商業学校(現在の県立神戸商業高等学校)を移転させ、残りの東側敷地に県立神戸病院を移転させることとした。1900(明治33)年4月、県立神戸病院の新築工事が竣工し、4月25日、旧所在地の神戸下山手通から楠町の旧鎮台屋敷跡地に移転、同日新築落成式が挙行された(当時の建物は現存しない)。こうして楠地区の歴史が動き出すのである。

1917(大正6)年12月、隣接する県立神戸商業学校が火事により焼失。1919(大正8)年5月、県立神戸商業学校の校地(現在の外来診療棟、病院正門及び立体駐車場付近)を買収して敷地を拡充し、現在の附属病院敷地がほぼ確保された。



兵庫県立神戸病院の裏庭で行われた看護婦の体操(昭和初期)



兵庫県立医学専門学校 1944(昭和19)年頃

## ■ 兵庫県立医学専門学校設置から医学部設置まで

1944(昭和19)年1月、兵庫県立医学専門学校の設置が認可され、4月に開校した。県立神戸病院は同校の附属医院となった。同校のキャンパスは、附属医院(旧県立神戸病院)の南側に隣接する神戸市立第二高等女学校及び市立女子商業学校が共用していた鉄筋4階建ての校舎と敷地を神戸市から譲渡されたものであった。これが現在の医学研究科・医学部医学科の研究棟B・C・D棟(旧基礎学舎北棟・南棟・共同研究館)の所在地である。医学研究科・医学部医学科研究棟の敷地が、道路を挟んで附属病院の敷地と離れているのは、このように元々別の学校の敷地だったからである。

県立医学専門学校は、1946(昭和21)年に大学昇格を果たして県立医科大学となり、1952(昭和27)年に新制の県立神戸医科大学となった。国立移管され神戸大学医学部となるのは1964(昭和39)年である。当時神戸大学では、積極的に六甲台地区への学舎統合が行われており、各地に分散していた学部のひとつが六甲台地区に移転されたが、医学部及び医学部附属病院だけは楠地区に留まった。

## ■ 福原京の遺構(楠・荒田町遺跡)

NHK大河ドラマ「平清盛」が来る2012(平成24)年に放送される。平清盛と神戸は縁が深い。平安時代から明治時代初めの東京奠都まで、日本の都はずっと京都にあったと思いきや、実は神戸にも都が置かれたことがある。都の名は福原京。平安時代末期の1180(治承4)年に平清盛の強い意向で京都から都を移したものの、約170日間という短い期間で終わった「幻の都」である。その福原京の遺構とみられる日本最古級の二重濠が、2003(平成15)年に神戸大学医学部附属病院構内で発見され、大きな話題となった(現在の立体駐車場付近)。この一帯は楠・荒田町遺跡と呼ばれ、1981(昭和56)年から現在まで断続的に発掘調査\*\*が行われている。

清盛が夢の跡に凜然として建つ神戸大学楠地区。世界をリードする医学の「都」を目指して、さらなる発展に日々挑んでいる。

(神戸大学附属図書館大学文書史料室講師 野呂理栄子)

\* 医療機関のみが存在した期間(1900~1943年)を含めると楠地区が学内最古となる。なお、教育機関としての学内最古のキャンパスは、明石市内の神戸大学附属小学校(1902(明治35)年設置の兵庫県明石女子師範学校跡地)である。

\*\* 2010(平成22)年5~8月には第46次発掘調査が行われた。

お知らせ

## 「神戸大学統合研究拠点」が活動開始



神戸大学統合研究拠点は平成23年4月に1期工事が完工し、8研究プロジェクトが入居して、研究活動を開始しました。2期工事（国際コンベンションホールなどの関連施設）は平成23年12月末の竣工を予定しています。

神戸大学統合研究拠点においては、分子から宇宙に至るまでの広範囲なスケールでの学術研究を進展させる目的で、下記の8研究プロジェクトが活動を開始しています。

- 1 ① 統合バイオリファイナリー研究プロジェクト
- 2 ② 先端膜工学研究プロジェクト
- 3 ③ 神戸宇宙開発研究プロジェクト
- 4 ④ 構造ベース創薬研究プロジェクト
- 5 ⑤ 国際健康学研究プロジェクト
- 6 ⑥ 計算科学・計算機工学研究プロジェクト
- 7 ⑦ 神戸計算科学人材育成プロジェクト
- 8 ⑧ 惑星科学国際教育研究プロジェクト

それぞれのプロジェクトの内容は、統合研究拠点のホームページ（<http://www.kobe-u.ac.jp/kuirc/>）でご覧いただけます。

<神戸大学統合研究拠点>

〒650-0047 神戸市中央区港島南町7丁目1番48  
TEL：078-599-6710





<http://www.kobe-u.ac.jp>

神戸大学広報室 発行 2011年 10月 14日

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 TEL.078-803-5022 E-mail : ppr-kouhousitsu@office.kobe-u.ac.jp